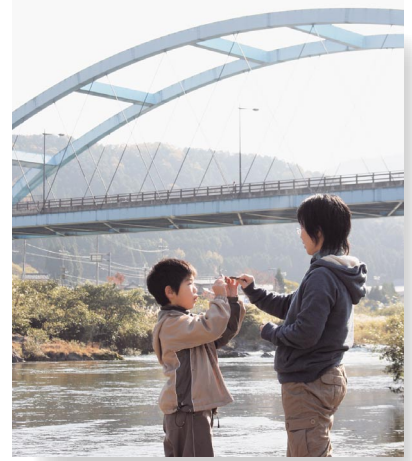


京丹波町総合計画



人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち
さと
丹波高原文化の郷 ● 京丹波



KYOTAMBA TOWN



はじめに

丹波町、瑞穂町及び和知町の合併により誕生した京丹波町にとって初めての総合計画。平成19年3月に基本構想が定まり、10月には基本計画がまとまりました。3町合併から2年、いよいよ本格的に新たなまちづくりが動き出したと言えます。

さて、総合計画の基本構想で位置づけているように、京丹波町のまちづくりの中心（キーワード）は「人」です。

いまや地方の時代となり、今後は地域間競争が激化していきます。あわせて、健康や癒し、安らぎを求める志向の高まりとともに、真に豊かな農村環境が再評価される時代になってきています。こうした意味からも本町は、まちづくりの正念場を迎えており、これからは行政だけでなく町民の皆様、団体、民間事業者などが、ひとつの旗印のもとで一体となってまちの特性を生かした独自の高原文化をつくり出し、食や生活文化その他さまざまな分野において、本町の魅力をさらに高め、発信し、いかに本町へ「人」を呼び込むかが重要となってきます。もちろん、保健・福祉・子育て・教育などは、まちづくりの基礎的な分野として高度にあること、また、町民の皆様が健康で安心して暮らせるまちとすることは、まちづくりの大前提であると位置づけています。

また、多くの「人」、すなわち町民の皆様と共に進める「協働のまちづくり」がこれからのまちづくり推進のための重要な柱となります。総合計画の推進にあたっては、町民、団体、民間事業者などと行政との協働を基本としながら、町や地域が抱える共通の目標や課題に対し、相互理解と信頼を前提とし、共に考え協力する中で実践することが大切です。ひいては、それが町民の皆様の喜び、生きがい、誇りへとつながり、元気な人、元気な地域、さらには元気なまち「躍動するまち」へと発展し、町の自立や個性あるまちづくりが成り立っていくと思います。

わたしたち地方を取り巻く情勢は、今後さらに厳しさを増すと予想されます。総合計画をもとに財政状況を見極めながら実施計画を立て、さらには見直しを行いながら的確・適正に事業を推進し、将来目標像「人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち 丹波高原文化の郷 ●京丹波」の実現、さらには、住民福祉の向上と本町の限りない発展のために、こん身の努力を尽くす決意でありますので、より一層のご支援、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

結びに、計画策定にお世話になりました町議会、町総合計画審議会、須知高等学校、アンケートを通じて貴重なご意見をいただきました多くの町民の皆様、各種団体の皆様に対し心からお礼申し上げ、総合計画書発刊にあたってのごあいさつとさせていただきます。

平成20年2月

京丹波町長 松原 茂樹

目次

第1部 総論

第1章	総合計画の策定にあたって	7
	1 総合計画策定の趣旨	8
	2 計画の目標年次と構成	10
第2章	京丹波町の特徴	11
	1 立地的・自然的特徴	12
	2 歴史的背景と町の沿革	14
	3 町の概況	17
	4 住民アンケート調査結果の概要	20
第3章	まちづくりの基本的な留意事項	23
	まちづくりの基本的な留意事項	24

第2部 基本構想

第1章	京丹波町がめざす将来目標	29
	1 将来目標像	30
	2 将来人口フレーム	32
	3 地域構造	33
第2章	主要プロジェクトの設定と方向づけ	37
	1 プロジェクトの設定	38
	2 プロジェクト別方向づけ	40
第3章	基本構想の実現に向けて	49
	基本構想の実現に向けて	50

第3部 基本計画

第1章	まちづくりの基本方針	55
	まちづくりの基本方針	56
	計画の構成	58
第2章	未来をひらく人を育てます	61
	1 人権尊重	62
	2 幼児・学校教育	64
	3 生涯学習・スポーツ・レクリエーション	71
	4 子ども・青少年の健全育成	75
	5 文化	77
	6 国際・地域間交流	80
第3章	人と人、みんなが支えあう、 安心・安全なまちをつくれます	83
	1 健康づくり	84
	2 福祉	88
	3 医療	97
	4 安心・安全	100
第4章	魅力ある産業をはぐくみます	107
	1 農林水産業	108
	2 商工業	117
	3 観光交流	119
第5章	豊かで美しい環境を守ります	121
	地球と人にやさしい環境	122

第6章	人が暮らす、集う、 定住・交流の基盤をつくれます	127
	1 定住基盤	128
	2 水資源・上水道	131
	3 下水道等	135
	4 情報通信	137
	5 道路・交通	140
	6 河川	146
	7 土地利用	147
	8 交流基盤	150
第7章	まちづくりのしくみをつくり、強めます	153
	1 協働のまちづくり	154
	2 行政運営	158
	施策の体系	161

資 料

京丹波町のまちづくり共同研究会実施概要	171
京丹波町総合計画審議会設置条例	172
諮問書	173
答申書	173
京丹波町総合計画審議会委員等名簿	174
京丹波町総合計画審議会審議経過	175
用語説明	176

人のぬくもりとふれあいが奏でる躍動のまち 丹波高原文化の郷●京丹波

第1部

総論

第1章

総合計画の策定にあたって

1 総合計画策定の趣旨

3町合併後のまちづくりの指針

丹波町、瑞穂町及び和知町の合併にあたって、合併後のまちづくりの基本的な方向づけを行った「新町まちづくり計画」が3町間で協定されており、今後は、これを基本とした新しいまちづくりの推進が求められます。

総合計画は、「新町まちづくり計画」をより具体的に検討・補充し、京丹波町のまちづくりを推進する上での指針となる計画として策定するもので、厳しい財政状況が続く中で、より効果的な推進を図るため、町民、団体、民間事業者等と行政が力を合わせてさまざまな施策を展開する協働のまちづくりを基本とします。

時代的变化に対応した計画づくり

社会経済の成熟化

西欧型近代化からの飛躍 ～ 独自性の高いまちづくりを

わが国は、明治期以降、「殖産興業」を中心に、「欧米に追いつけ追い越せ」を目標とした各種施策を行ってきました。その結果、「西欧型近代化」を成し遂げて世界有数の経済大国となり、社会経済は「成熟」の段階に到達しました。もはや模範となる目標を他に求める時代は終わり、わが国自身が未来を独自に切り開いていかなければならない立場に立たされています。

このようなときこそ、地域が持つ特性を見つめ直し、それぞれの地域がたどってきた歴史的な発展過程を振り返り、地域固有の歴史に根ざした独自性の高い、誇りの持てるまちづくりを進めていかなければなりません。

分権時代の到来

地域間競争の激化 ～ 地域経営力の強化を

従来の中央集権型社会の指向は、わが国の社会経済の増進に大きな成果を上げてきましたが、他方で、国と地方公共団体の財政問題、人的・物的資源の都市集中による弊害なども生じています。今日では、こうした状況を解消するために地方分権化が国を挙げて推し進められています。

地方分権時代は、地方の経営運営による「地域間競争」の時代でもあり、今後ますます地域間の競争が激化することが予測されます。

国と同様に地方自治体の財政状況の悪化も顕在化し、これまで進めてきた行政主導による地域づくりや行政サービスの効率化等が困難を増している今、地方の経営運営の基盤をいかに確保して、戦略的な地域づくりを進めていくかが大きな課題となっています。

こうした中で、地域資源を最大限に活用して地域の個性を磨き、価値を高めることをめざすとともに、行政だけでなく、町民、団体、民間事業者等を含む多様な主体によって戦略的に地域を経営運営していく、いわゆる「地域経営」の力量を高めていかなければなりません。

日本文化のルーツ・ふるさと探し

農村文化・農村環境等の再評価、都市・農村交流を

地域の独自性を高めるために、各地で地域文化のルーツ探しが進められています。

また、一方では、戦後の経済政策等により大都市へ人口が集中した結果、ふるさと喪失世代が多く生み出され、心のふるさとを求める動きも活発化しています。

これらが、健康や癒し・やすらぎを求める志向とも相まって、農村文化・農村環境、食文化の見直し、農業の再評価などにつながってきています。この表れである近年の都市・農村交流は、ますます活発化する傾向にあります。

少子高齢化と人口減少の時代

新しい社会福祉像やライフスタイル像に対する施策の展開を

少子高齢化の進行と人口減少時代の到来に伴い、急速に増大する高齢者の福祉ニーズへの対応や定年退職期を迎えた「団塊の世代」の今後の生活スタイル等をめぐる議論が盛んに行われています。

これらは全国的な問題ではありますが、京丹波町においても、地域内で展開可能な施策の検討と推進が必要となっています。

その他の時代潮流の進展

時代的なニーズ変化に対応した施策の展開を

その他の時代的な潮流として、国際化・高度情報化のますますの進展、地球温暖化問題をはじめとした環境問題の深刻化、災害・犯罪・危機管理等の問題の顕著化などがあります。

また、わが国の今後の大きな方向づけを示すものとして、観光立国、技術立国等が掲げられ、それらに関連する施策が多彩に展開されつつあります。

このような時代的なニーズの変化にも柔軟に対応しなければなりません。

地域における広域交通環境の変化

地域力を強めて変化に対応を

京都府を南北に貫く京都縦貫自動車道のうち、未整備区間となっている丹波～綾部間が完成すると、交通結節点としての京丹波町の拠点性は低下し、通過地域になってしまう恐れが生じています。

古くから交通の要衝として発展してきた京丹波町にとっては、大きな状況の変化であり、これに対応するための方策が求められます。

※**団塊の世代**：第二次世界大戦後、昭和22年～24年（1947～49）ごろの第一次ベビーブーム時代に生まれた世代のこと。

※**地球温暖化**：人間活動の拡大により、大気中に大量に排出された二酸化炭素などの温室効果ガスの濃度が高まることによって、地球の気温が上昇する現象のこと。

※**危機管理**：大地震などの自然災害や不足の事態に迅速に的確に対処できるよう、事前に準備しておく諸政策のこと。

※**観光立国**：美しい日本の再生、都市の活性化、新しい地域文化の創造等により、そこに住んでいる人がその地に住むことに誇りを持つことができ、幸せを感じることによって、その地を訪れる人にとっても魅力を感じる「住んでよし、訪れてよしの国づくり」を実現しようとするもの。

※**技術立国**：主として先端的な技術によって産業競争力の強い国にしていこうとするもの。

※**京都縦貫自動車道**：宮津市から久御山町までの約100kmを結ぶ高規格幹線道路（一般国道478号、自動車専用道路）のこと。

2 計画の目標年次と構成

計画の目標年次

総合計画は、平成19年度から10年間の長期的な計画とし、平成28年度を目標年次とします。

計画の構成

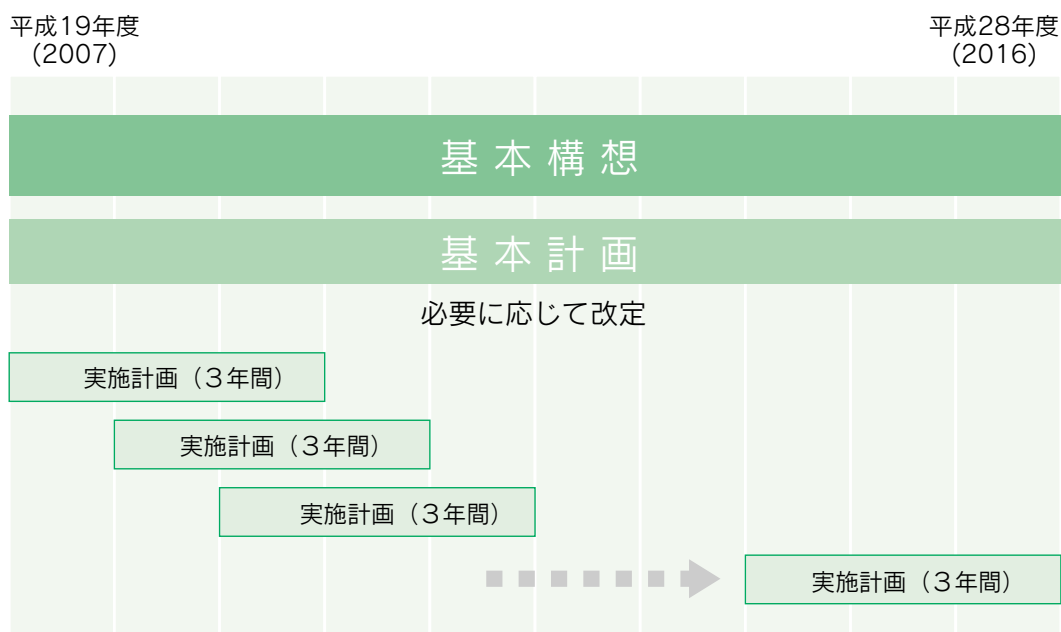
総合計画は、基本構想、基本計画及び実施計画で構成します。

基本構想は、京丹波町がこれから進めるまちづくりの基本的な方向や主要なプロジェクトを定めます。

基本計画は、基本構想を実現するための基本的かつ主要な施策の体系等を示すとともに、施策の展開に向けた基本方向等を定めます。

実施計画は、基本構想及び基本計画に基づき実施する具体的な事業について、3カ年の年次計画として策定し、ローリング方式による進捗管理を行います。

なお、総合計画策定後において著しい社会経済情勢の変化等が生じた場合は、必要に応じて計画の改定を行うものとしします。



第2章

京丹波町の特性

1 立地的・自然的特性

立地的特性

由良川上流域の分水嶺地域

京丹波町は、京都府のほぼ中央部にあって、由良川水系の最上流域、分水嶺^{れい}地域に位置しています。町の面積は303.07平方キロメートル。

そのうち約8割を森林が占めるほか、標高200～600メートルの山々の間に田園が広がる高原地帯や、由良川上流に沿って形成された河岸丘陵地帯があります。

分水嶺に立地することから、旧来から水資源に乏しい地域であり、産業振興や生活文化の向上等に制約を受けてきました。



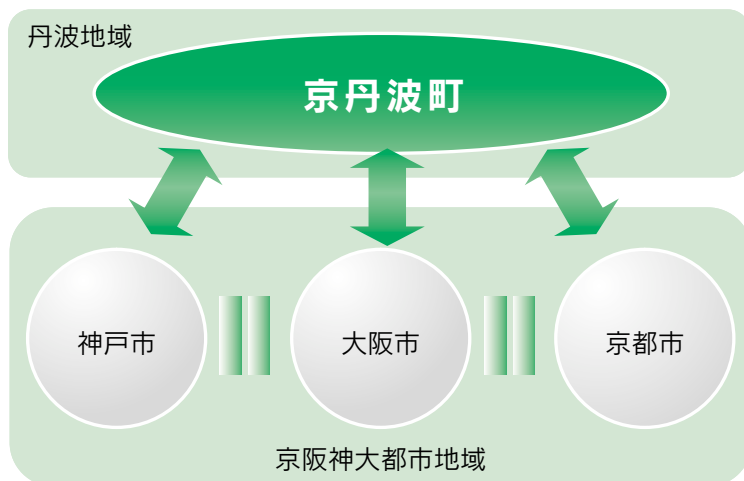
大都市近郊の自然環境豊かな農業地域

京丹波町は、京都、大阪、神戸等の大都市地域の郊外にあって、それぞれからおおむね1時間という距離圏に位置しています。

この立地特性を生かして、古くから京都、大阪、神戸等への食の供給地としての役割を果たしています。



京丹波町と京阪神大都市地域



自然的特性

高原地帯

京丹波町は、丹波山地の中にあつて、比較的標高の低い高原状の地形に恵まれています。豊かな自然環境を持つ高原状の地形は、京阪神大都市周辺地域にあつては貴重であり、盆地が多い丹波地域の中でもきわだった特色となっています。



気候

京丹波町は、由良川上流部の丹波高原に位置することから、日本海側気候と内陸性気候をあわせ持つ気候特性を有しています。

夏は、盆地に比べて比較的冷涼で昼夜の寒暖の差が大きいのが特徴となっています。冬は、冷え込みが厳しく、また、日本海側からの季節風の影響を受けてしぐれやすく、降雪や積雪があります。降水量は、年間を通じて比較的少ない方です。また、秋から冬にかけて霧が発生しやすいのが特徴です。



※**丹波山地**：丹波高原・丹波高地とも呼ぶ。中国山地の東端に位置し、京都府の中部から兵庫県西部にまたがって高原状を形成している。
※**日本海側気候**：北海道から山陰地方に至る日本海側の冬型気候の特徴をなすもの。日本海岸式気候とも呼ばれる。西高東低の気圧配置になったとき、日本海を渡ってきた大陸からの風が海上で水蒸気を蓄えて山脈にぶつかるため、雨や雪となる。

※**内陸性気候**：内陸側（盆地や本州内陸部）に見られる気候をいう。山間に位置するため、太平洋や日本海からの季節風がさえぎられ、雨が少なく、夏と冬、昼と夜の寒暖の差がはげしい。

2 歴史的背景と町の沿革

歴史的背景

古代の丹波

「丹波」は、古代は「たには」と呼ばれ、京都府の口丹波・中丹・丹後地域や兵庫県の丹波地域を含む広大な国を形成していました。この「たには」の国は、明治期に京都府と兵庫県に分割されましたが、「丹」の付く地名はそれぞれの地域に今も残されています。

京丹波町は、「たには」の国の南部に位置し、京都府の口丹波（現在の南丹地域）の一角を占めています。

中世以降の歴史的特性

○京の都とかかわりながらも盆地や谷ではぐくまれた独自の文化を醸成

古くは都と深くかかわりながら発展してきましたが、都とは山でさえぎられ、丹波山地の中に数多くの小盆地が存在していることから、都や大都市地域とは異なる独自の文化圏を形成してきました。



○交通の要衝・結節点として発展

由良川流域と桂川流域との分水嶺にあって、川の交通の結節点的な位置を占め、文化の交流拠点としての役割を果たしてきました。

陸の交通では、古くから京の都と丹後や山陰地方を結ぶ山陰街道、大阪方面とを結ぶ山陰篠山街道の結節点に位置し、畿内文化圏と山陰文化圏の中継地帯となっていました。また、交通の要衝として街道沿いに宿場町等を発達させていました。



○特色ある農林産物の供給地として発展

古くから穀倉地帯として発展し、京の都や大阪等に農産物や林産物を供給してきました。近代に入って、酪農や野菜類、さらにはキノコ類等の換金作物を導入し、京都府を代表する豊かな農林産物の供給地として発展してきました。



○地域に根づく伝統文化

地域の風土や長い歴史の中で培われ受け継がれてきた伝統文化が、町内の各地域で多くの人びとの手によって継承され息づいています。和知人形浄瑠璃や小畑万歳、和知太鼓、丹波八坂太鼓、質美八幡宮曳き山行事をはじめ各地域に根づくさまざまな伝統文化は、人びとの心をつなぎ、町に個性と誇りをもたらしています。



近年の動向

○工業の進出、住宅団地の開発

京阪神大都市の発展の影響を受けて、工業の進出や住宅団地の開発等が一部地域で進みましたが、地域全体としては、水資源の不足等もあってそれほど顕著に進展するには至っていません。

このような中で、計画に基づいた新たな水源の確保により住宅団地への給水も始まっており、今後、住宅整備が進むことが予測されます。

○都市との交流活動による地域活性化

豊かな自然的・農村的環境を生かして、京阪神地域との交流による地域活性化対策を進めています。

特に、安心・安全な農産物を道の駅や朝市等で販売する取組みは、町内各地で活発化しており、府内でも先進的な地域のひとつになっています。また、各種の交流拠点施設の整備にも積極的に取り組んでいます。



町の沿革・3町合併の経緯

沿革

明治22年の町村制施行時には9村がありました。明治34年に須知村が町制を施行して須知町となり、昭和26年には桧山村、梅田村、三ノ宮村及び質美村が合併して瑞穂村が誕生しました。また、昭和30年には須知町と高原村が合併して丹波町が、上和知村と下和知村が合併して和知町が誕生しました。また、同年、瑞穂村が町制を施行し瑞穂町となりました。

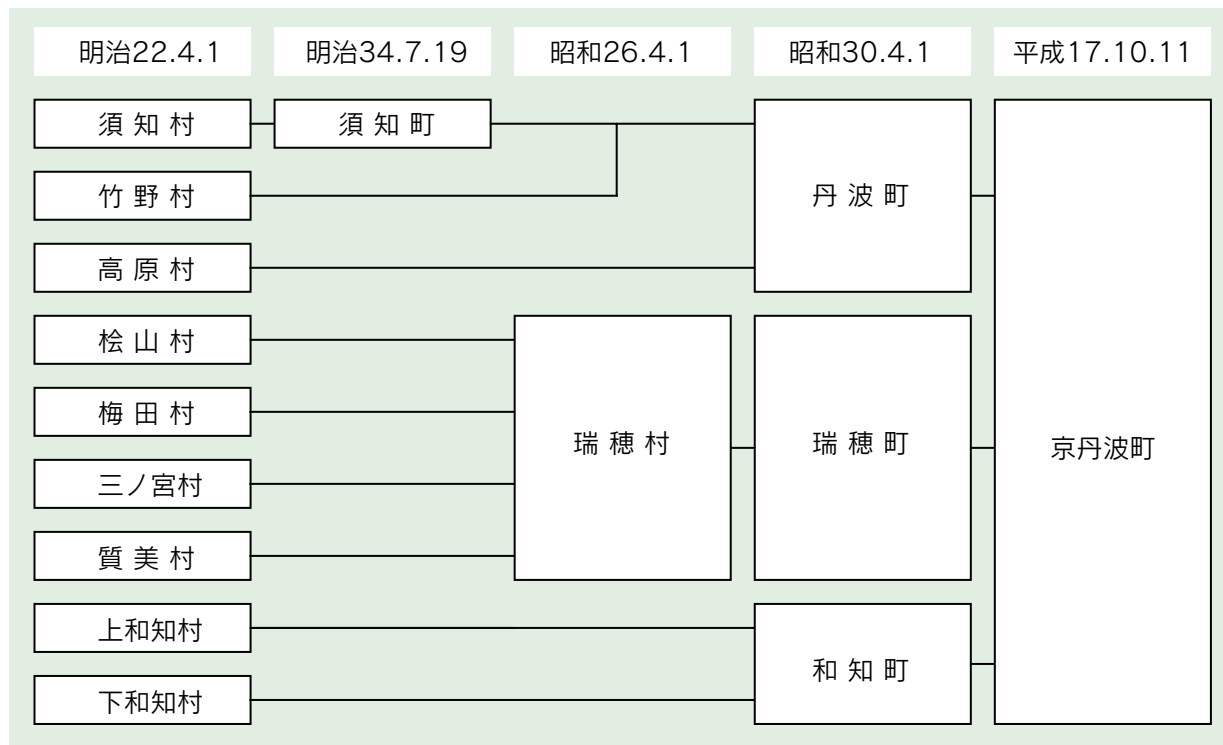
丹波町、瑞穂町、和知町となって約50年が経過した平成17年10月11日、3町が合併し京丹波町が誕生しました。

合併の経緯

合併に係る協議は、平成13年8月の「京都中部地域行政改革推進会議」に端を発し、平成14年12月の「北桑田・船井地域任意合併協議会」の設立後、本格的な検討が始められました。以後、任意合併協議会と並行して各町で検討が進められた結果、住民の意向や地理的条件、風土、行政課題の共通性などの理由から、人の交流を中心に古くから親密な関係を保ってきた丹波町、瑞穂町及び和知町の3町の枠組みで合併協議が進められることになりました。

平成16年4月1日に法定の「合併協議会」を設立して協議を進め、平成17年10月11日に京丹波町が誕生しました。

合併の歴史

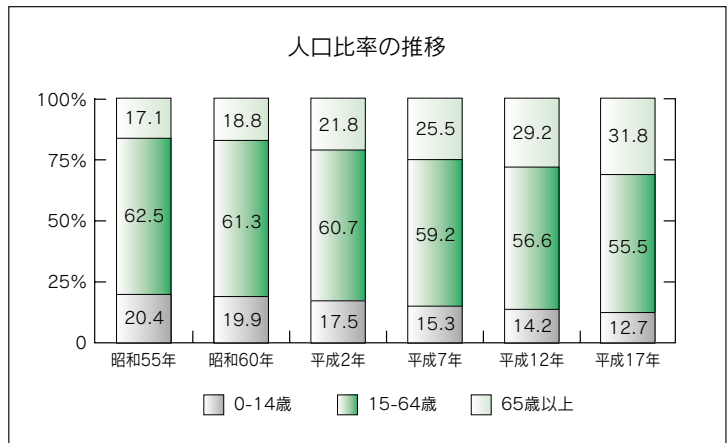
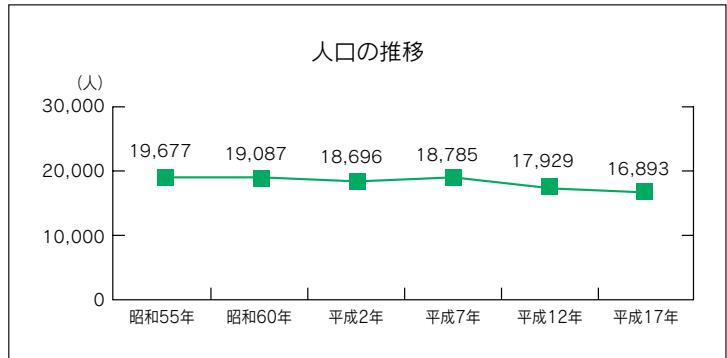


3 町の概況

人口動向

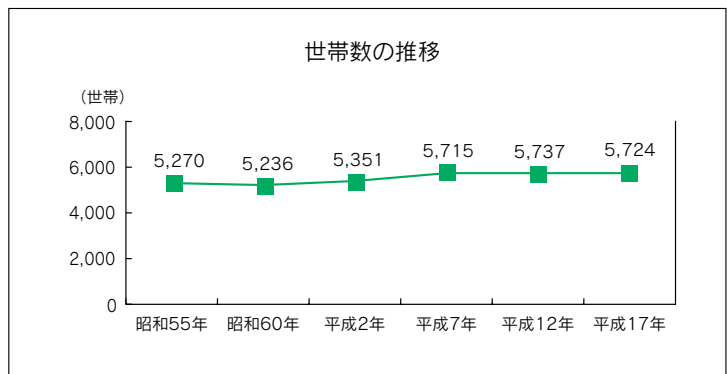
京丹波町の人口動向を見ると、平成7年以降は漸減しており、平成17年では16,893人となっています。

年齢3区分別の人口推移を見ると、少子高齢化が顕著に進行しており、同年では老年（65歳以上）人口比率が31.8%（5,367人）、年少（0-14歳）人口比率が12.7%（2,150人）となっています。



国勢調査

世帯数の推移を見ると、平成7年以降はほぼ一定で推移しています。人口減少と少子高齢化の進行状況を勘案すると、若年層の転出と高齢層の自然減によって世帯人員が減少していることがうかがえます。



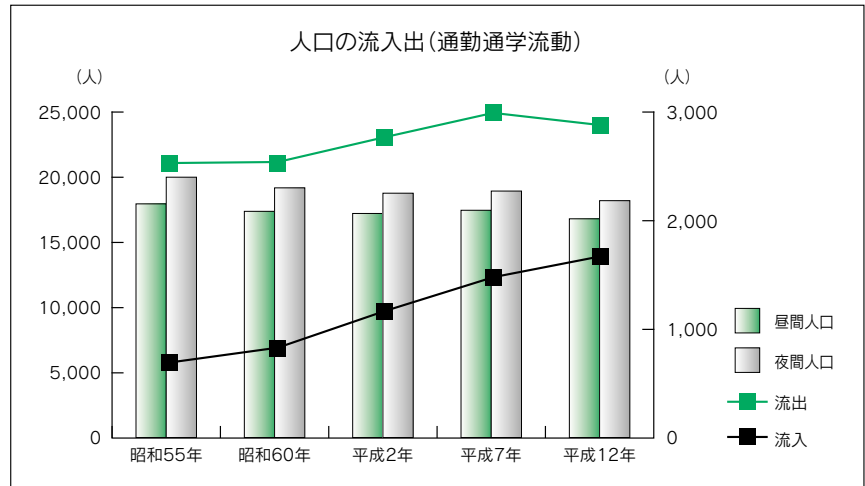
国勢調査

※**老年人口比率**：総人口に対する65歳以上人口の割合のこと。高齢化比率または高齢者比率とも呼ばれる。

※**年少人口比率**：総人口に対する15歳未満（0歳～14歳）人口の割合のこと。幼年人口比率とも呼ばれる。

人口の流入出の動向

人口は流出超過の基調ですが、園部町（現在の南丹市園部町）や亀岡市など近隣市町からの人口流入の増加を受けて、その程度は漸減してきています。また、平成12年には人口流出にも歯止めがかかっています。



人口の流入出（通勤通学流動）

	流 出	流 入	流入超過	昼間人口	夜間人口
昭和55年	2,533	690	△1,843	17,834	19,677
昭和60年	2,534	799	△1,735	17,352	19,087
平成2年	2,749	1,143	△1,606	17,090	18,696
平成7年	2,989	1,456	△1,533	17,252	18,785
平成12年	2,856	1,650	△1,206	16,723	17,929

主要な流入元・流出先が占める割合(平成12年) (%)

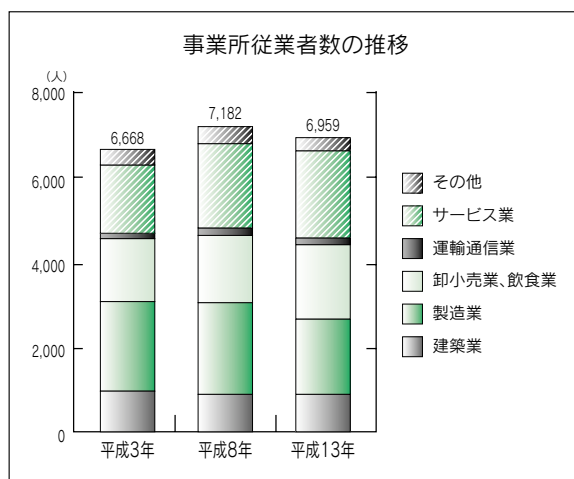
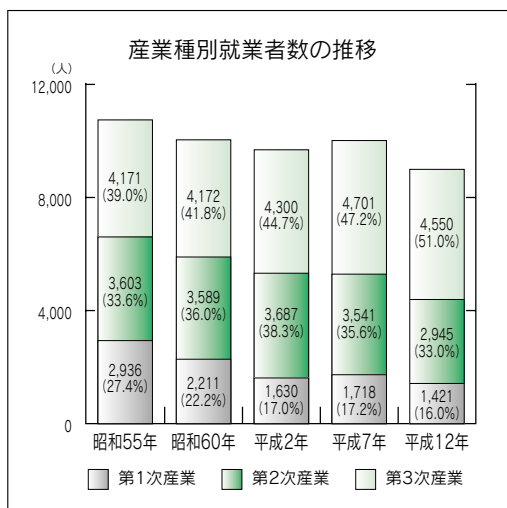
	流 入	流 出
京 都 市	5.6	15.0
亀 岡 市	13.6	10.9
園 部 町	14.4	15.3

国勢調査

※その他市町は10%に満たない。

就業構造

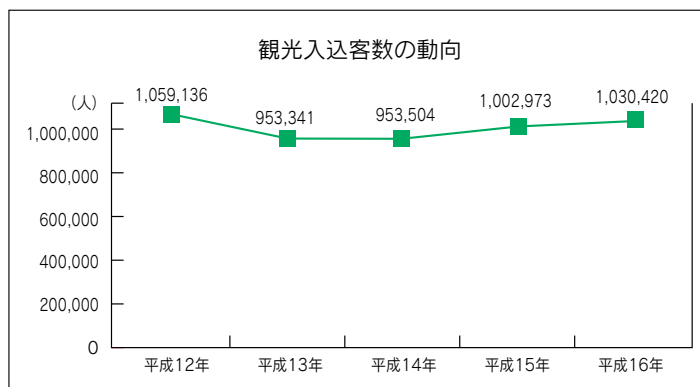
産業構造は、第1次産業が減少し、第3次産業が増加しています。産業分類別に見ると「製造業」の減少、「卸小売、飲食業」「サービス業」の増加がうかがえます。



京都府統計書

観光入込客数

京丹波町への観光入込客数は、平成12年から13年にかけて減少していましたが、その後は増加に転じ、平成16年には約103万人となっています。



京都府統計書



観光・交流の取組み

京丹波町では、立地特性を生かして、京都や大阪等の大都市地域との交流による活性化策を進めてきています。特に農産加工品をつくって道の駅や朝市等で販売する取組みは、京都府内でも先進的であり、町内各地で進められています。

農産加工品施設	京都・丹波食彩の工房、瑞穂マスターズハウス、わち北部農産加工場、その他加工グループの施設
道の駅	丹波マーケス、瑞穂の里 さらびき、和（なごみ）
朝市	丹波高原朝採り野菜市、みずほ野菜市、わちふれあい朝市 等
交流拠点施設	府立丹波自然運動公園、府立和知青少年山の家、グリーンランドみずほ、わち山野草の森、ウッディパルわち 等
その他観光資源	琴滝公園、質志鐘乳洞公園、野鳥の森（鳥獣保護区特別保護地区）、自然双生運動公園、長老ヶ岳（登山コース・森林公園・七色の木）、道路情報センター「伝統芸能常設館」、大福光寺（国重要文化財）、九手神社（国重要文化財）、渡辺家（国重要文化財）、明隆寺観音堂（国重要文化財）、塩谷古墳公園、旧宿場町（須知等）、葛城神社（八朔祭）、八坂神社（御田祭・しめ縄づくり・おけら火参り）、質美八幡宮（曳き山行事）、和泉式部の墓、野菜みこし（中台区・下大久保区）、たんば夏まつり、瑞穂納涼大会（夏）、わちふるさと祭り（夏）、きょうと瑞穂まつり（秋）、わちふれあい祭り（秋）、和知川（鮎釣り・カヌー）、丹波ワインハウス、観光農園、貸し農園、アマゴ山菜まつり・ほたるファンタジー、琴滝「冬ほたる」 等

4 住民アンケート調査結果の概要

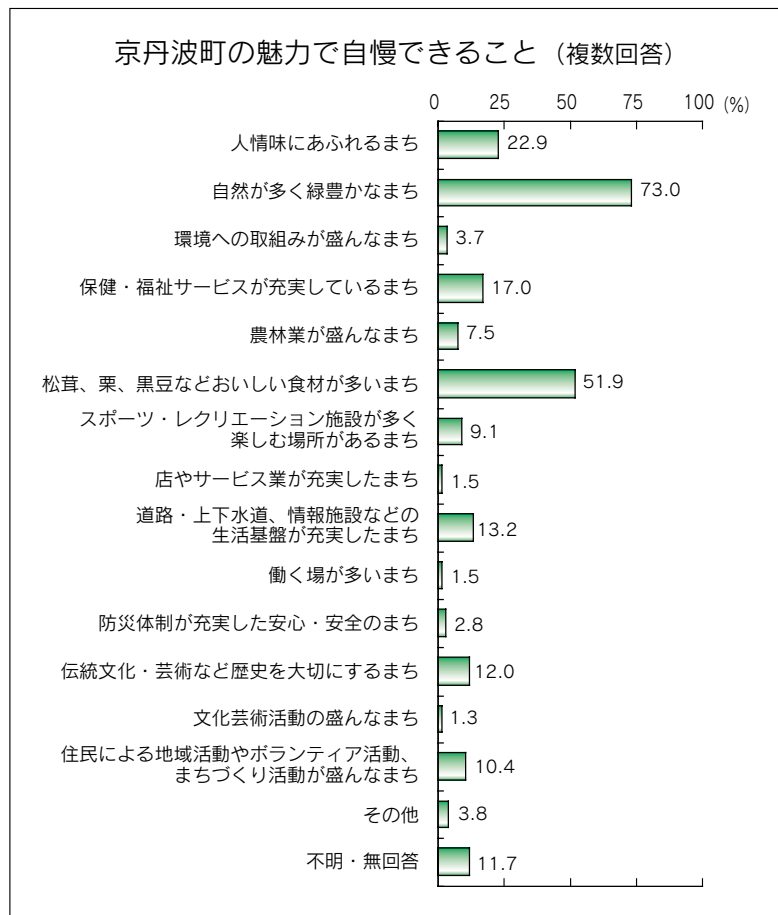
総合計画の策定にあたって実施した住民アンケートの主な結果は、次のとおりです。

調査概要

対 象	3,000人
基 準 日	平成18年7月1日現在
抽出方法	18歳以上の町民を住民基本台帳・外国人登録の中から無作為抽出
調査期間	平成18年7月19日～平成18年7月31日
回 答 数	1,338人
回 答 率	44.6%
方 法	郵送（往復）

京丹波町の魅力について

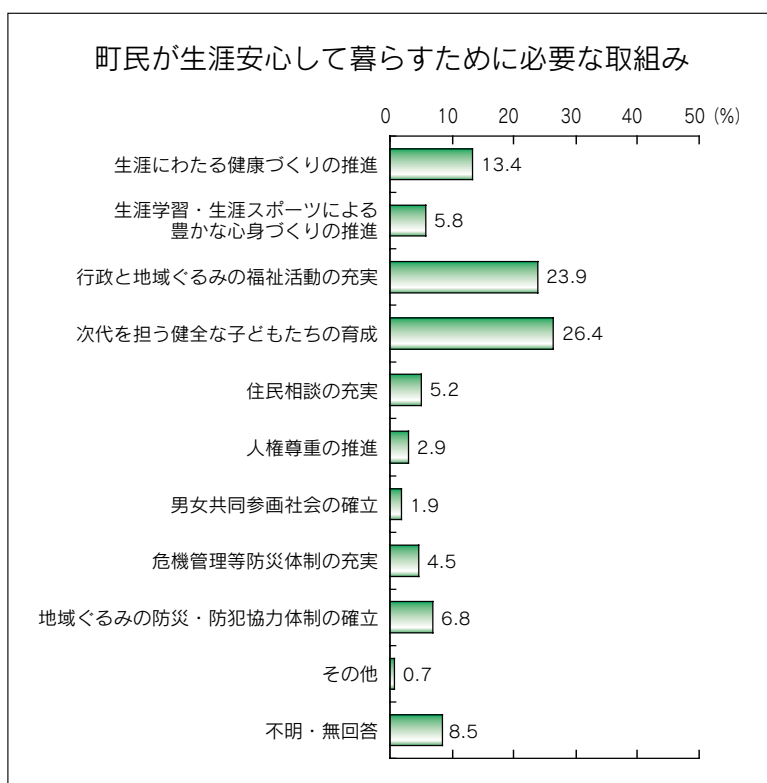
京丹波町の魅力を町外の人に紹介するとき、自慢できることは、「自然が多く緑豊かなまち」が73.0%と最も多く、次いで「松茸、栗、黒豆などおいしい食材が多いまち」が51.9%となっています。



今後のまちづくりの主要な取組みについて

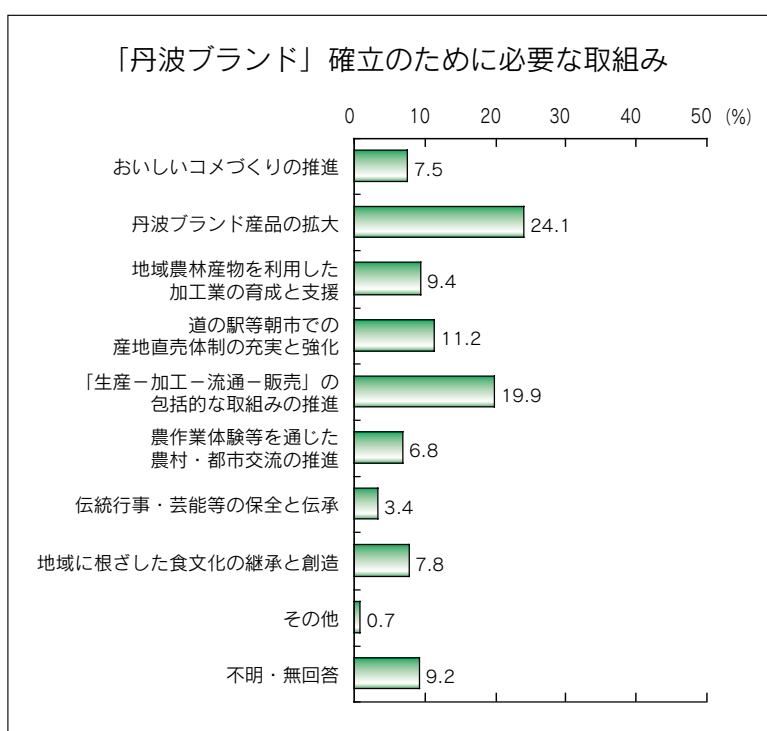
町民が生涯安心して暮らすために必要な取組み

すべての町民が生涯にわたり安心して暮らしていくために必要な取組みは、「次代を担う健全な子どもたちの育成」が最も多く26.4%、次いで「行政と地域ぐるみの福祉活動の充実」が23.9%、「生涯にわたる健康づくりの推進」が13.4%などとなっています。



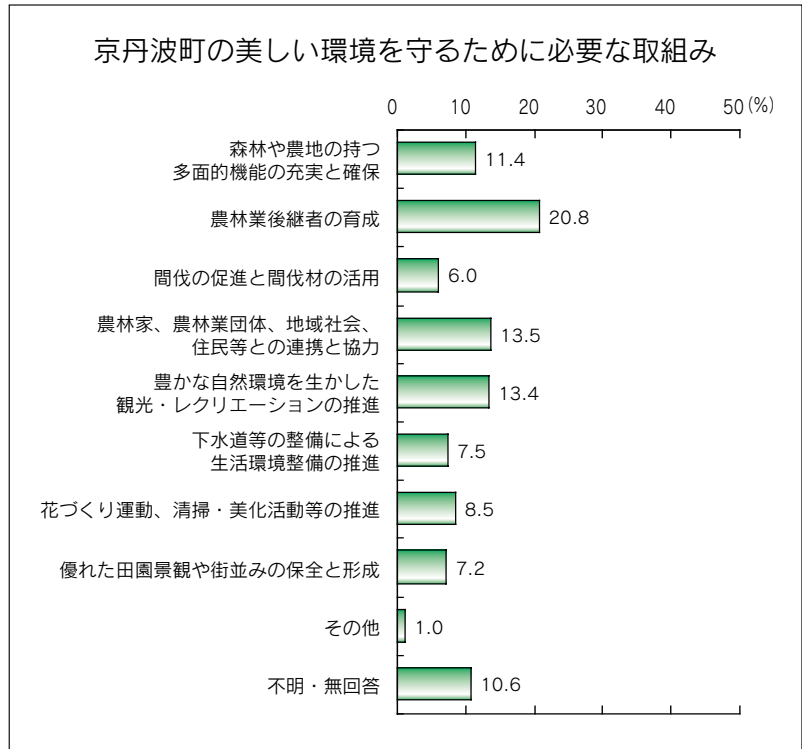
「丹波ブランド」確立のために必要な取組み

「丹波ブランド」を確立するために必要な取組みは、「丹波ブランド製品の拡大」が最も多く24.1%、次いで「[生産－加工－流通－販売]の包括的な取組みの推進」が19.9%、「道の駅等朝市での産地直売体制の充実と強化」が11.2%などとなっています。



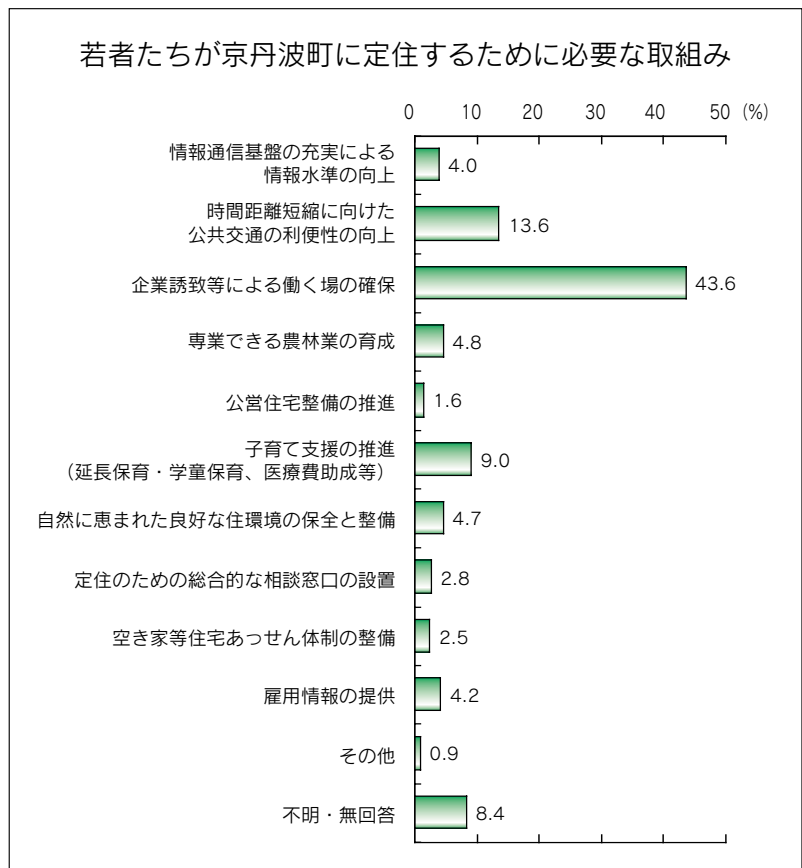
京丹波町の美しい環境を守るために必要な取組み

京丹波町の美しい環境を守るために必要な取組みは、「農林業後継者の育成」が最も多く20.8%、次いで「農林家、農林業団体、地域社会、住民等との連携と協力」が13.5%、「豊かな自然環境を生かした観光・レクリエーションの推進」が13.4%などとなっています。



若者たちが京丹波町に定住するために必要な取組み

若者たちが京丹波町に定住するために必要な取組みは、「企業誘致等による働く場の確保」が最も多く43.6%、次いで「時間距離短縮に向けた公共交通の利便性の向上」が13.6%、「子育て支援の推進（延長保育・学童保育、医療費助成等）」が9.0%などとなっています。



第3章

まちづくりの
基本的な留意事項

まちづくりの基本的な留意事項

これまで見てきた諸事項を踏まえて、京丹波町におけるまちづくりの基本的な留意事項を整理すると、次のようにまとめられます。

地域の立地特性を十分に生かす



大都市郊外の「高原地域」としての特性を十分に生かしていません。

- 「環境」では、高原らしい自然や景観づくりが求められます。
- 「食」では、高原のまち京丹波町らしいブランド製品づくりを強力に進める必要があります。

高原地域の中で豊かに暮らす生活文化を町民が共有し高めていこうとする意識の醸成が求められます。あわせて、地域における取組みや地域全体としてのイメージの打ち出しが必要となってきます。



高原地域としての特性を生かして、都市との交流活動や各種特産品づくり等を進め、地域経済力を強化するとともに、高原地域での生活を求める定住者や週末定住者等の受け入れ態勢を整えていくことも求められます。

京丹波町全体としてのまとめりや連携の強化

京丹波町の経済的基盤を強化していくには、都市との交流活動や対外的な販売活動等が必要であり、町全体としての戦略的な取組みが求められます。



町民生活を安全で快適に送るためにも、町全体としてのまとめりや各地域間の連携を強めていくことが必要です。

地域基盤のネットワークの強化



町内には、3本の国道をはじめとする幹線道路が多く、また、京都縦貫自動車道の整備も進められています。これらを生かして地域内の道路ネットワークを強化する必要があります。

鉄道については、今後の都市との交流活動による地域活性化に向けて強化すべきものとして位置づけられます。そのためには、駅周辺機能の強化と鉄道の利便性を高める環境づくりが必要となってきます。





情報基盤については、合併後の一体的なネットワークを形成していくことが求められます。

協働のまちづくりの推進

地域の特性を生かし、地域間競争に打ち勝ちながら、特色ある地域と豊かな町民生活を実現していくには、財政基盤が脆弱化^{ぜいじ}してきている行政の力だけでは困難です。

こうした中で、町民、団体、民間事業者等と行政が目標を共有しながら、協働のまちづくりに取り組んでいくことが求められています。

